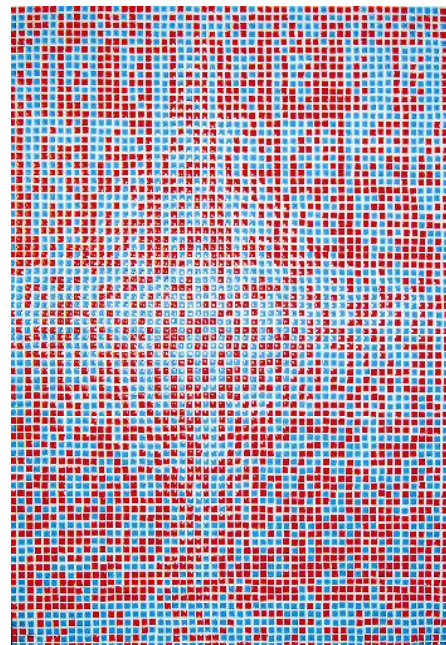


NO-36

Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa JAPAN www.galleryokinawa.com

中ザワヒデキ

[illegible]

2004 年

(美術家／なかざわ ひでき)

思考と感覚 ― 中ザワヒデキの試み

千葉成夫

中ザワヒデキの出発点は、絵が好きだったことにある。そして次の、というかもう一つの出発点は、しかし普通の絵をふつうに描くことには抵抗があったことにある。

それからいろいろあった（のだろう）けれど、とにかく彼は美術表現に向った。世代的には「昭和 40 年会」と同世代で、しかも彼らと出会い、その一員になった。そこで、彼らと、普通の絵（美術）ではない、何か新しいもの、何か違うことをやりたいという問題意識を共有したにちがいない（ちなみにこの「問題意識」は、「具体」も「日本反芸術」も「日本概念派」も「もの派」も「美共闘」も、ザックリ括ってみればほぼ同じである）。

ただ、「昭和 40 年会」世代もまた、まもなくそれぞれの道が訣れていった。なかで中ザワヒデキは、「制度（美術市場、教育等）」にも「サブカル」にも「物語（表現）」にも「映像」にも行かなかった。彼は「絵画」そのものに向ったのである。「昭和 40 年会世代」でまともに「絵画」に向った作家はじつはきわめて少ないことを、みなさんは知っているだろうか？

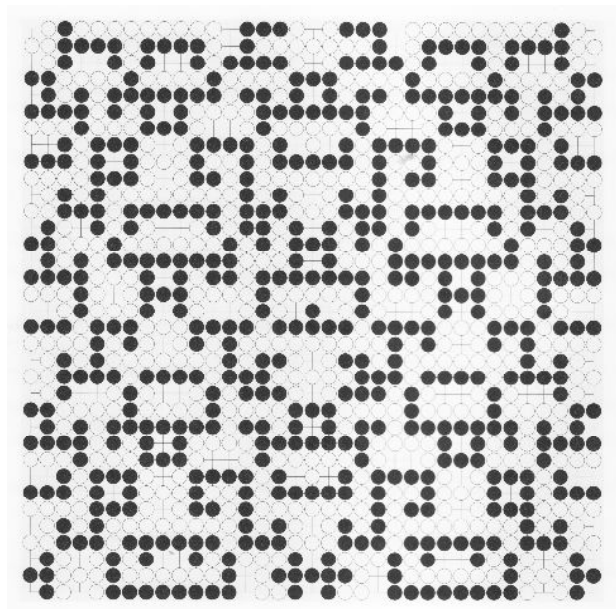
その意味では、彼が取った道は正道である。それゆえに容易ならざる道である。どんな道を行っても苦労はある、なんて阿呆な意味ではない。正道とは乗り越え難い道进行の道である。だから、だいたい美術家は迂回路を行くのであり、そして迂回路のつもりが、だいたい道を逸れてしまう。中ザワヒデキは「王道」を選んだ。それは、真正たりうる美術家の第一歩にほかならない。

しかも彼は、この「王道」で「普通の絵」はやりたくない。では、彼がやっているのは何か？

とりあえず、「観念としての絵画」、あるいは「観念のなかで絵画となる絵画」である。ほんとうは、彼自身は現時点で自分の作品をそういうものだと考えているだろうが（また、そうでなければやらないだろうが）、それは、まだ無理である。なぜなら、そうなるためには今の（彼も含めた）僕たちの「思考形式」と「感覚形式」そのものが大きく、すなわち質的に変容しなければならないからだ。それ

は、根本的には誰かがやろうとしてできることではありえない。だから僕は「とりあえず」と言う。

だが、「王道」であること、従来とは異なる絵画として僕たちが想定しうる、ごくごく僅かなもの（道）の一つであることは確かである。なぜって、従来の絵画がいま完全に行き詰って終局に来ている事実を僕たちは日々眼にしているからだ。この「先」へ行くには、とりあえず、「思考」でいくか「感覚」でいくか、しかない。中ザワヒデキのいう「方法」とは、だからとりあえず、この前者のことである。



「三五目三五路の盤上布石絵画第一番」

1999年、スクリーンプリント、アルミニウム板、90×90cm

でも、「方法」が「方法のための方法」に堕してしまう例を、僕たちはかつての「概念芸術」でいくらでも見てきた。「方法のための方法」ほど安易なものはない。中ザワヒデキの作品が真正の道にあると僕が感ずるのは、彼の「感覚」のいわば「異様さ」ゆえである。つまり、とても変っているのだ。この異様な「感覚」、「感性」が、彼の整序されている「方法」の裏側につねに貼り付いている、ように思われる。

そして遡っていくと、この「異様さ」のほうは、彼がとにかく絵が好きだったという、第一の出発点にまでつながっているはずである。
（美術評論家／ちば しげお）

中ザワヒデキの楽しみ方

武田美和子

中ザワヒデキの作品を目の前にして、多くの人は戸惑いを覚えるにちがいない。初期のアクрил作品をのぞいて、これを美術作品と思うことのほうが難しい人々もいるであろう。その時、人々の反応は大きく分けて3つあると思っている。ひとつは、まったく理解ができないということで拒絶してしまう。もうひとつは、現代美術とはこのようにわけの分からないものなのだと訳知り顔で分かったフリをする。そして、もっとも数の少ない、なんとか作家の真意を汲み取ろうとする人々である。

先の2パターンの人々は当然のことながら、中ザワ作品を楽しむことはできない。しかしながら、何とか作家の真意を汲み取ろうとするひとびとに対してさえ、彼は更なる試練を与える。目の前に並べられた中ザワヒデキの作品から、中ザワヒデキの思考を理解しようとするとは非常に難しいからである。つまり作家自身は人に分かってもらおうとして作った作品は存在しない。彼の思考を必要かつ最低限に、作品化しているに過ぎないからである。

では、中ザワは自分の考えたことをわかってほしくないのかといわれると、実は一般人の数倍もわかってほしいのである。そして、それは非常な快楽であるはずである。それが快楽でないのならこれほどまでに制作を続けることはできないであろう。それが彼の制作の原動力でもある。彼が非常に嫌がることにバイアスがかかるということがある。このことに関する彼の執着は異常なものがある。それほど彼はわかってほしいのである。しかも彼の思考そのままにニュアンスを持たずに、である。分かってもらうための作品を作るためには相手の受け取り方を想像し、意識しなければできない。中ザワも当然のことながらそのことを理解しているし、世間に受け入れられ評価を得るためには必要だということもわかっている。しかし、その行為はバイアスがかかることになり100%の理解を得られないことができない。このことが彼にとって非常に重要なのである。

もうひとつ、彼の自らに課した制約について説明したい。初期に非常に色彩豊かなアクрил絵画を制作していた中ザワは、コンピュ

ータで描くという制約を自らに課した。当時のコンピュータは現在と違って非常に画素数も少なく斜めにまっすぐ線を引くことすらできないものであった。しかし、この制約は中ザワにとって非常に楽しいものであったようだ。すぐさまこの制約を逆手にとった、バカCGといわれるものを生み出した。次に方法主義で中ザワは色彩やマチエールに関する制約を課している、この中から文字を色やマチエールに置き換えるという画期的な作品群が生まれている。創造の初期段階での制約があり、それを楽しんでいる作家の快楽が見て取れるのである。

脳波ドローイング

中ザワヒデキ ライブ・パフォーマンス
Nakazawa Hideki "Brain Waves Drawing"

2006年11月4日(

第1回 11:00 ~

第2回 14:00 ~

11月5日(

第1回 11:00 ~

第2回 15:30 ~

府中市美術館公開制

協力：日本光電工業株式



脳波ドローイング試作中の中ザワヒデキ (国際10/20通に
2006年8月24日 メディカルシステム研究所(東京都文京区) 撮影=星月

通常、画家は筆や鉛筆を手に持って絵を描く。だが芸術創造の場面において、手の活動よりも、脳の活動自体のほうが、より重要で本質的なものである。そこで私は頭に電極を取り付け、脳の活動を自ら制御すること

脳波ドローイング／ライブ・パフォーマンス

2006年11月、府中市美術館のフライヤーより

むかし、制服が決められているときに、少しスカートを短くしたり、長くしたりしたことを思い出してみたい。制約があるが故の快楽とはそれに近いものではないだろうか。

私はアートディーラーとして作家と関わっている。展覧会を開催するたびに、中ザワが今度はどんな快楽を見つけたのであろうと嫉妬することがある。今回の展覧会は初期の作品から近作まで網羅されている。できれば、彼の快楽を想像して、楽しんでいただければ幸いである。

(アートディーラー／たけだ みわこ)



2007年夏（沖縄にて）

中ザワヒデキについて

「手で描かない脳で描く」／脳波ドローイング。とんでもない美術家が現れたものだ。2006年11月の東京都府中市美術館で行われた中ザワヒデキ氏のライブ・パフォーマンスの告知フライヤーのコピーである。頭部に20数個の電極を装着した写真（3P）に衝撃を受けた。一体何をやろうというのだろうか？意識下の生理的感情を打描しようというのか、いやそうではなく「脳の活動を自ら制御することによって、絵を描くことにした。」（先の府中市美術館フライヤーで中ザワは述べている。）あくまでも自覚された主体的表現で、作家への興味は尽きない。

翌2007年4月ギャラリーセラー（名古屋市）の個展「脳内混色絵画」を観た。二次会の席で私は中ザワ氏に脳波ドローイングについて訊いてみた。「脳波の描線は単色だけど、なぜか？脳内各部の反応が違うはずだし、色分けして描写したほうが面白いのでは、」彼は無然とした表情で「いや感情はいらない」ときっぱり応えた。

社会状況や政治思想、造形論を持ち込む美術家を多く見てきた。もちろん否定するものではない。むしろ私的には美術への主の関心はその領域の中にある。同世代の多くがサブカル美術に歩みを進める時代にあって、特段、中ザワは違って見えた。中ザワのクールな眼差しの奥に広がる地平は、今まで私が接したことがない世界である。絵画を科学し、幅広く自在に表現する新しい美術家像を感じた。

話しは前後するのだが、同個展の会場「脳

内混色絵画」の前で「どうして感情や物語性やポリティカルなものを排除するのか」と質問した。中ザワは「私はスーラの色彩に興味がある」と短く答えた。ここで、勝手な思い込みだが、中ザワはモダニズム美術の出発点とも言える後期印象派、とりわけ新印象主義の絵画論（色彩理論）に立ち至って、色彩にこだわり、色を立体化し、絵画の新たな成立可能な領域を模索し、探求し続けていると理解してよいだろうか。だとしたら、この原点再読とピュアな考察は、バーチャル視覚が流行る時代に、新たな絵画＝視覚の本質を問い、視覚に拘泥する表現物質、の時代の到来を予感させるようだ。

中ザワヒデキは1963年新潟県に生まれ神奈川で育つ。ヒデキ少年はよほど絵を描くことが好きな少年だったに違いない。小学、中学、高校生時代と多くの美術展で入選や賞を受賞し、81年（高三）第11回神奈川県青美術展で準大賞を受賞している。

82年千葉大医学部に入学。医学生時代も中ザワは絵（アクリル画）を描き続け、83年には第4回日本グラフィック展に入選するなど、その創作意欲は止まらず、86年には早くも初「個展」を開いている。89年の手書きによる「近代美術史テキスト」の発表の後、90年には医局を辞退しイラストレーターの道を歩む。ポストモダンの渦が流れ、絵画の終焉が叫ばれる混迷の中、中ザワは手わざによる描写ではなくパソコンを使用（マウス）した「大ボケツ」シリーズ「バカCG」を発表し美術界で知られるようになる。今回展示される「セルフポートレート（大ボケツ第三番）」はPCによる「へたうま時代」の代表的作品の一つと言えるだろう。

正直なところ、最近まで私は「美術家中ザワヒデキ」の仕事はあまり知らなかった。「バカCG」の作品は多少記憶にあるが、コンセプチュアルな「方法絵画」の作品や「方法主義宣言」の活動などほとんど知らなかった。しかし、本棚の美術手帖や、朝日新聞の連載記事（07年1月～07年3月）、中ザワ氏から進呈頂いた、同人誌「妃」など、「美術家宣言」をした97年以降の「方法絵画」の活動やその作品とコンセプトを知るに至ると、私の古びた美術の認識回路が、ぐちゃぐちゃになり困惑した。昨年末から年始に開催された渋谷ブンカムの回顧展は、一貫した中ザワ絵画の地平が示され、中ザワワールドのコンセプチュアルな「知の回路」を知らされた。従来のモダニズム解釈から放たれ、もう一つのモダニズムの認識回路（ネオモダニズムといってよいのだろうか）の発見を示される思いだった。今展は沖縄で初めて初期から最新作のオイル画までダイジェスト版で紹介する。（画廊主／上原誠勇）